

松尾聰

全釋源氏物語

卷二



筑摩書房版

全釈 源氏物語 卷二

若紫・末摘花・紅葉賀

定價 一、六〇〇円

昭和三十四年二月十月初版第一刷発行
昭和四十二年八月二十日初版第二刷発行

著者 松尾 總

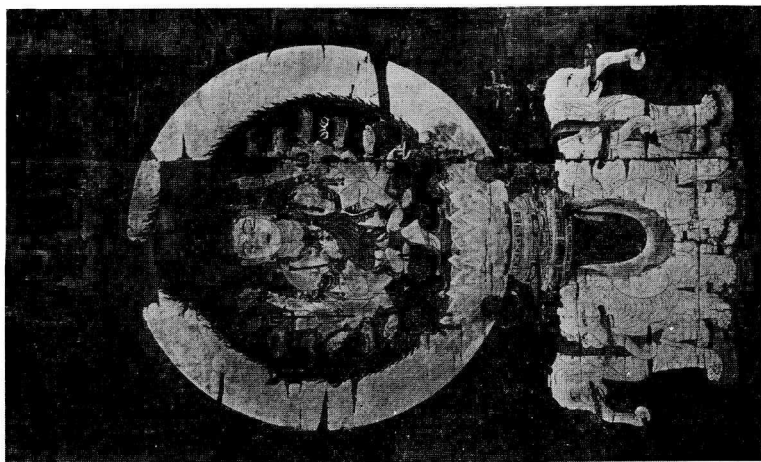
発行者 竹之内 静雄

印刷者 多田 基

發行所 株式会社 筑摩書房

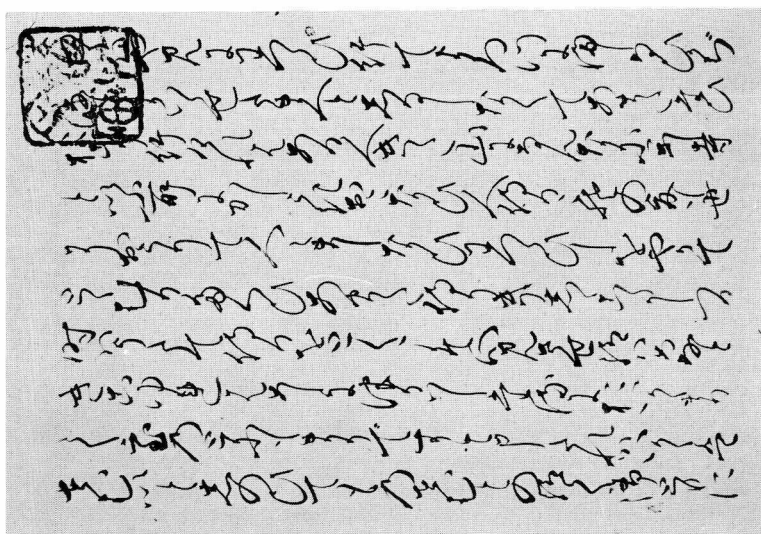
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京 〇七六五一(代表)
振替東京 四一一二三

福柳寺蔵普賢菩薩像



あなかたは、と見ゆるものは、鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおはゆ。 (二二六ページ)

蓬左文庫蔵源氏物語若菜巻冒頭



里村紹巴筆各草本のうち。
本巻の筆者は不明。

凡 例

巻一のはじめに付けた凡例のなかから、この巻にも関係のある事柄をえらび、さらに新しく一、二補うべきことを加えて、次にかゝげることとする。

一、本書は「本文」と「口訳」と「注」とから成っている。「本文」を下段に置き、その本文に当る「口訳」を上段に掲げ、口訳だけでは説明に欠けるところがあると思われる語や句については、本文中のそれらの部分の右肩に漢数字の番号を付し、本文のあとにその番号を頭において、それらの「注」を施した。「口訳」のなかで、歌はすべて（二字下げに組んで）散文訳だけをかゝげたから、下段本文中の原歌を参照されたい。

一、本文は池田亀鑑博士の「源氏物語大成校異篇」の底本に拠った。源氏物語の伝本には本文のはしぐしにおいて若干の異同があり、現在のところ、伝本は、その本文によっていわゆる青表紙本・河内本・別本に三大別されているのであるが、なかで、青表紙本が最も原形に近いものと考えられている。青表紙本は藤原定家が家の本とした一証本であって、「花散里・柏木・早蕨」の三帖は定家自筆の原本が現存しているが、他は散佚してしまつて、その忠実な伝写本も、完全に近い帖数を保有しているものは極めて稀で、大島雅太郎氏蔵吉見正頼旧蔵飛鳥井雅康自筆本

をもって随一とするといわれる。この本は、大内政弘が、貴重すべき青表紙証本を当時の名筆であった權中納言飛鳥井雅康（永正六年〔一五〇九〕十月没）に依頼して、複本作成の意味で忠実に写さしめたものと推定されているが、現在では、第一帖桐壺・第五十四帖夢浮橋の兩帖は別筆であり、浮舟の一帖はこれを欠く。このうち浮舟の欠帖は恐らく偶然的脱落であろう。又、桐壺・夢浮橋の兩帖は、もと雅康自筆の兩帖を、正頼が家本を重からしめようとて、聖護院道増（近衛尚通の子種家の弟）・道澄（種家の子）に書写を依頼して、その成れるものを以って雅康自筆の兩帖と入れかえたものと判定される。こんなわけで、雅康自筆本だけをもってたゞちに底本とはなしたいので、池田博士は、花散里・柏木・早蕨の三帖は現存の定家本を用い、桐壺・夢浮橋の二帖、および浮舟には雅康自筆本に次ぐべき地位をもつという池田博士本（伝藤原行能等各筆）を採り、又、初音は雅康自筆本が別本系統の本文を伝えているために、同じく池田博士本を用いて底本としている。但しその他の帖々は、すべて雅康自筆本が底本である。

一、大成底本本文を本書の本文として採用するに当っては、句読点を施し、段落を立て、仮名には適宜漢字を宛て、仮名づかいを正し、会話の部分（ときには心中語の部分にも）には「かぎ」を施して、読みやすいようにした。なお原本本文に「御」をあててある語は、少なくともあるものについては「おほん」と読むべきかとも思われるが、通説に従って、「御とき」を「おほんとき」と読むほかは、すべて「おん」と読んでおいた。但し「御らん」については「ごらん」と読むべきであろう。なお「おまへ・おもと・おまし・おもの」などに限って「御」にあたるものが「お」と仮名書きされることがあるが、「お」につづく語が「マ行」にはじまるものであることから見れば、これらもそれ／＼「おんまへ・おんもと・おんまし」と読まらるべきものかもしれない。これら原本本文に仮名書きされ

ている「お」は、本書の本文でも仮名で示した。原本文に漢字をあててある動詞に送り仮名が添えられていない場合は、ふつうの読みに従い、音便で読むべきかとも思われる「思たまへましかは」なども「思ひたまへましかば」と「ひ」を送って読んでおいた。

一、本書の本文は一切改めないことをもって原則としたが、稀に明らかに誤りと認められるものについては、仮りにこれを改めて、その旨を「注」に記した。また誤りかと疑われるものについては、その旨を「注」に記すと共に、できるだけ他本の異文を「注」に掲げた。

一、口訳は、いちじるしい不自然感を覚えさせない限りにおいては、逐語直訳を旨とし、みだりに説明のことばを補わないで、原作のおもかげを保持することにとめた。

一、口訳にあたって、現在会話には用いない「である」体を避けて、会話に用いる「ます」体を選ったのは、当時の物語は、作者が自ら話して聞かせる代りに書きつづったもので、従って読者は（作者に代って）声に出して他人又は自らに読み聞かせたものと考えられるからである。

一、普通の注釈書では、本文中の会話には、話者の主体を示す人名の略号を付記し、又、口訳文中には、できるだけ主語を補って、読みやすくすることにとめているが、ともすれば原作の味をそこなうことが多いのを考慮して、本書では、本文においては一切そのことを廃し、口訳文においては、誤られやすい場合をのぞいて、できるだけそれを控えた。

一、口訳は現代仮名づかい・当用漢字に従うようにとめた。口訳文の中の「御」は、振仮名を施さない場合は、すべて「い」と読みたい。

一、注は、一般読者が本文理解に必要と思われる範囲内において、なるべくくわしく施すようにつとめた。一冊のなかで、同じ言葉に対する同じ注をくりかえしていることがあるが、読者の便を慮ったためである。

一、古来異説のあるものについては、一理ありと判断される限りは、なるべく諸説を注記するように心がけたが、次項にのべるような事情のほかに、紙幅の都合もあって、必ずしもすべてを尽くしているわけではない。

一、諸説は、広汎かつ精細・正確な研究的な調査を完了した上で、これをかゝげるべきであったが、そうしたことは、資料的にも、時間的にも、今の私には到底できないので、その説が誰によつてはじめて提唱され、誰によつて支持され、あるいは批判されたというようなことには、あまり重きをおかないで、たゞ私がついた範囲での諸説そのものの内容——それも多くは現代諸家の諸説について——を主として、簡単に並べあげることにした。従つて、当然かゝげるべき卓説なり芳名なりを落して、諸家に対して礼を失していることも多いかと思われる。御寛恕を願いたい。

一、この巻の口訳および注を施すにあたっては、藤原伊行の「源氏釈」、四辻善成の「河海抄」、一条兼良の「花鳥余情」、三条西実枝の「明星抄」、中院通勝の「岷江入楚」、北村季吟の「湖月抄」、契沖の「源註拾遺」、賀茂真淵の「源氏物語新釈」、本居宣長の「源氏物語玉の小櫛」、石川雅望の「源注余滴」、萩原広道の「源氏物語評釈」、宮田和一郎氏の「頭註対訳源氏物語」、金子元臣氏の「定本源氏物語新解」、島津久基博士の「対訳源氏物語講話」、吉沢義則博士の「対校源氏物語新釈」、「源語釈泉」、佐伯梅友博士の「源氏物語新抄」、池田亀鑑博士の「日本古典全書源氏物語」、玉上琢弥氏の「評釈源氏物語」、「評註源氏物語全釈」、山岸徳平氏の「日本古典文学大系源氏物語」、北山谿太氏の「源氏物語の語法」、「源氏物語のことばと語法」、「源氏物語辞典」、谷崎潤一郎氏の「新訳源氏物語」、

佐成謙太郎氏の「対訳源氏物語」などの学恩を被ることが甚大であった。記して謝し奉る。なおこれらの諸書は、河海抄・花鳥余情などについては間々学習院大学蔵写本などを参考したが、その他はすべて現行の活字本によった。(明星抄は、国文注釈全書に「細流抄」として収録されているものが、それであるといわれるので、それを用いた。)又、それらの諸書に引用されている書(たとえば弄花抄)は、手許に確かめるべき資料がない場合は、そのまゝ孫引きしたことが多い。他日、吟味されなければならない。

一、諸注釈書の探索・整理、その他について長谷川和子氏の多大なる援助を得た。氏の厚情には深く感銘している。一、読みさして、再び読みつゞけるときの便宜を考えて、各帖のはじめに、その帖の梗概こうがいと略系図をかゝげた。従って、はじめから読みつゞけられる読者においては、梗概は、むしろその帖を読み終えられたのちに、目を通されることを希望する。

目次

若紫……………一

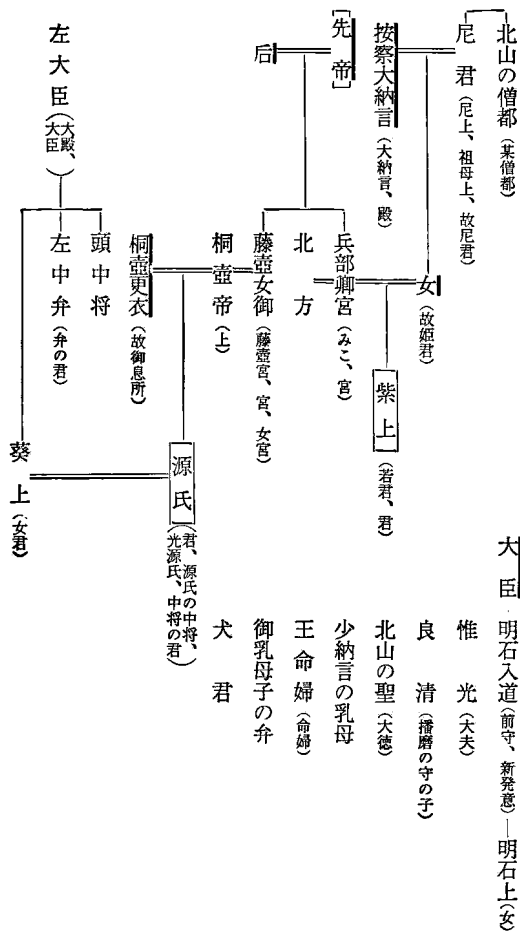
末摘花……………一五九

紅葉賀……………二六五

若

紫

(わかむらさき)



源氏はおこりをわすらうて、いろ／＼とまじないや加持などさせたが、きゝめがないので、北山のある寺に験のある聖がいると聞いて、三月末のある日にでかけた。加持のあい間に、高い所にて、真下の僧房に眼がとまつたが、聞けば、有名な某僧都が二年來籠っている所とでかけた。供人は、その僧坊に女がいると騒いでいた。源氏は好奇心をおこした。供人は、また、源氏に明石入道の一人娘の噂を聞かせたりした。夕方、源氏は霞に紛れて、惟光を伴なつて、僧都の宿をすき見すると、四十あまりの品のよい色白の尼君と、十ばかりの美しい女の子がいる。しかもその子はあの藤壺に生き写しである。源氏は引きとつて明暮の慰めにしたいと思ひこんだ。源氏が山に來たことを聞いた僧都は、源氏を自分の宿に招いた。源氏は僧都のもとに泊つて、尼君は僧都の妹で、あの女の子は、藤壺の兄兵部卿宮が尼君の娘に生ませた子だったのだと知つて、いよ／＼心がひかれた。祖母の尼君にしきりに頼んだが、まだ幼いからといつて取り合はない。左大臣の子息たちの迎えを得て、源氏は帰京した。参内を終えて、左大臣邸に行くと、葵上はあいかわらず他人行儀なので、源氏は不快であつた。北山の僧都と尼君に手紙をとどけるが、どちらの返事もかわらない。惟光に命じて、尼のもとにいる少納言の乳母と交渉させたところ、乳母は、やはり尼君の病氣が小康を得て帰京の上で御返事しようとしきれない。その頃藤壺女御が病氣で里へ下つていたので、源氏は王命婦をせめて無理に逢う瀬をつくり、女御はついにたゞならぬ身となる。尼君の帰京ののち、源氏は時々手紙を送るが、返事はなと同じであつた。ある月の夜、通りがかりに尼君の病が重いと聞いて立ちよると、尼君は、源氏がほんとうに末ながく愛情をかけてくれるのなら、孫姫をたのむといつた。やがて九月二十日の頃に、尼君は死んだ。その後、源氏は故尼君の邸を訪ねて、幼い姫（のちの紫上。以下便宜、紫君とよぶ）のもとで一夜を明かして、「お人形遊びなどできる私の家へおいでなさい」とすゝめた。父の兵部卿宮は、それまでは紫君が継母（宮の北の方）に親しまず、継母も紫君に氣兼ねするふうだったので、迎へとることを見合せていたのだが、尼上を失つた今は、いよ／＼引き取ろうと考えて、その手筈をきめていた。源氏は、使として尼君の邸につかわした惟光から事情をきいて、父宮から迎へが明日來るという直前に、ひそかに紫君を自邸の二条院に連れて來てしまつた。乳母の少納言も、どうしようもなく一緒に二条院についた。源氏は、童なと呼びよせたり、絵やおもちゃを取りよせたりして、幼い紫君のごきげんをとるのに懸命であつた。故尼君の邸では、のこされた人たちは、父宮が來られて紫君の行方をお尋ねなのに困りはてたが、少納言にかたく口止めされていたので、たゞ「少納言が、どこかへ連れてかゝつてしまつた」とだけしか御返事しない。宮は僧都のもとにも尋ねられたが、ついに分らなかつた。紫君の住む西の対には次第に侍女たちも集まり、遊び相手の子たちものび／＼と遊ぶので、紫君も、源氏の留守の夕暮などにこそは尼君を恋ひ慕つて泣くが、父宮のことは特に思ひ出しもせず、源氏になつて、源氏が外出から帰つてくると、その懷に抱かれて、恥ずかしがりもしないといふありさまなので、源氏は、自分の娘でも、こんなに隔てのないふるまひはできないものと思つていた。

おこりにお苦しみになって、いろ／＼とまじないや加持などし申し上げさせなさいませけれど、きゝ目がなくて、いくたびも発作がおこりになりましたので、ある人が、

「北山に某寺（なにがし）というところに、尊い行者（ぎょうじや）がおります。去年の夏も流行（はや）りまして、行者たちがまじなつてもきゝめがあらわれなくて困っていましたのを、即座（そくざ）になおした例がたくさんございまして。御病氣をやりそこなわせてしまいますと、厄介（あつかひ）でございまして。早く、早速（さつそく）おためしあそばすのがよろしゅうございましょう。」

などと申しあげますので、その行者を召しに人をおやりになつていましたところ、

「年をとつて腰もかゞみまして、庵室（あんしつ）の外にも出ませぬ。」

とおこたえ申し上げていますので、

「しかたがない。ごくこつそりとでかけよう。」

と仰せになって、お供に親（した）しい者四五人ぐらいをつれて、まだうす暗いうちにおいになります。北山をすこし深くはいる所だったの

わらはやみにわづらひ給ひて、よろづにまじなひ加持（かぢ）などまゐらせ給へど、験（しるし）なくて、あまたたびおこり給ひければ、ある人、

「北山（きた）になむなにがし寺といふ所に、かしこき行人（おこなひと）侍る。去年（こぞ）の夏も世におこりて、人々まじなひわづらひしをやがてとゞむるたぐひあまた侍りき。しゝこらかしつる時は、うたて侍るを、とくこそ試みさせ給はめ。」

など聞ゆれば、召しに遣（つか）はしたるに、

「老いかゞまりて室（むろ）の外（と）にもまかです。」

と申したれば、

「いかゞはせむ。いと忍びてものせむ。」

と宣ひて、御供（おんぐ）に睦（なつ）まじき四五人（よたりつたり）ばかり

でした。三月の末なので、京の花盛りはすっかり過ぎてしまっていました。山の桜はまだ盛りで、ずん／＼分け入っていらっしやるのにつれて、霞の立っている様子もおもしろく見えますので、こんな様子もお見ねなならないで窮屈な御身分のこととて、自然珍らしくお思いになるのです。

りして、まだ暁におはす。や、深く入る所なりけり。三月のつごもりなれば、京の花盛りは皆過ぎにけり。山の桜はまださかりにて、入りもておはするまゝに、霞のたゝずまひもをかしう見ゆれば、かゝるありさまもならひ給はず、所せき御身にて、珍らしう思されけり。

(一) わらはやみにわづらひ給ひて 主語は示されていないが、よんでゆくうちに源氏であることがわかってくる。「わらはやみ」は癪病。和名抄に、「癪病俗云衣夜美、和良波夜美。寒熱井作、二日一発之病也。」とある。「おこり」と同じ。「にわづらふ」と言い、「をわづらふ」とは言わない。「病でなやむ・病にくるしむ」意。(二) まじなひ加持などまゐらせ給へど 「まじなひ」は名詞。祈りによって、神霊の力で災厄をはらうこと。「加持」は真言宗の儀式で、陀羅尼を唱え、所願成就を祈って行うもの。「まゐらせ」は「してさし上げさせる」の意で「せ」は使役の助動詞と解いておく。僧をして、自分(源氏)のために、加持をしてさしあげるようにさせる。「まゐる」は、源氏に対する僧の謙譲を作者の立場から表明したのである。「給ふ」はもちろん源氏に對する尊敬(「してさしあげるように」お(させ)になる。総角(薰ハ大君ガ)いと苦しげにし給へば、修法の阿闍梨ども召し入れさせ、さま／＼に驗ある限りして、加持まゐらせさせ給ふ(加持ヲシテサシアゲサセアソバサレル)。(三) あまたたびおこり給ひければ 「わらはやみ」の惡寒發熱の發作が、何度もお起りになったので。正確にいえば「おこる」主語は「わらはやみ」であるから、敬語の「給ふ」が添うのは誤りであろうが、「おこる」は「發作の状態を示す」というような意味に感じられて、源氏が暗に主語となっているのであろう。今日「病氣がおなおりになる」などというのと似ている。山岸徳平氏(日本古典文学大

系)は『給ふ』は省略せられた補語『源氏に』の敬語」とされる。用例をしらべたい。(四)北山 京都北方の山。旧注に、その「なにがし寺」を鞍馬寺として准拠を多く挙げている。なお、この場合、ほんとうに「ある人」が「なにがし寺」と話の中でいったつもりなのか、今日の小説の「××寺」というようなし方のつもりであるのかは、はっきりしない。(五)しこじらかす ふうは、「しこじらかす」は「しこじらかす」に同じで、「しこじらかす」は「病氣をなおし損う、こじらす」の意だといわれるが、佐伯梅友博士(新抄)が、万葉集に「しこり来めやも」(まちがっても来るものか)、「あきじこり」(買ひそこない。あきないのしそこない)という例があるので、しそこなう意の「しごくる」を想定し、さらにしそこなわせる意の「しごらかす」を考え、「やりそこなわせてしまえますと大変ですから」と解いて居られるのに従いたい。(六)とくこそ試みさせ給はめ 「こそ……め」は、すゝめるきもちをあらわす……するのがよい。「試み」は行者の験の力をためすこと。なお「させ」を使役の意とみて、「験の力を行者をしてためさせなざるのがよいでしょう」とも解ける。(七)四五人ばかり 「ばかり」は範圍を示す助詞。「四五人の程度」であって、「四五人だけ」ではない。(八)三月のつごもり 三月の下旬。三月の晦日のみを指すのではない。「つごもり」は「つきこもり」(月隠)の略で月末、又は末日のこと。(九)入りもておはする 「もて」は「持ちて」で上のことばのあらわす動作を持統する意をあらわす。「だんく……する・ずんく……する」などと誤す。(一〇)かゝるありさま 河内本には「かゝる御あるき」とある。河内本の方が通りはよい。

寺の様子もたいへんしみぐとしています。峰高く、深い岩の立ちめぐっている中に、聖は住んでいたのでした。そこへおのぼりになって、誰であるともお知らせにならないで、たいへんひどく身なりをやつしていらっしやいますけれど、それとはつきりわかる御様子なので、

寺のさまもいとあはれなり。峰高く、深きいほの中にぞ、聖入りあたりける。上り給ひて、誰とも知らせ給はず、いといったうやつれ給へれど、しるき御様なれば、

「あなかしこや。一日召し侍りしにや」

「これはこれは恐れ多いこと。過日お召しいたゞいたお方でいらつしやりましたか。今は、現世の事を考えておりませんので、験の方面の行法も捨てて忘れておりますのに、どうして、このようにおいてあそばしてしまつたのでしょうか。」

と、驚きさわいで、笑みをうかべ／＼お見申し上げます。たいへん尊い感じの大徳なのでした。然るべきものを作ってお飲ませ申し上げ、加持などしてさしあげるうちに、日が高く上つてしまします。外にすこし立ち出で立ち出でしてあたりを見渡して御覧になりますと、高い所で、なんと、あちらこちらにたくさん僧坊が自然隠れるところなく見おろされるのです。

「このつゞらおりの道のすぐ下に、同じ小柴垣だけれど、きちんと結いめぐらして、こぎれいな家や廊下などを建てつゞけて、木立もたいへん風情があるのは、何びとが住むのであらう。」

とおたずねになりますと、お供の者が、

「これこそあの某僧都が、二年このかた籠っておりますところ

おはしますらむ。今はこの世の事を思ひ給へねば、験方の行ひも捨て忘れて侍るを、いかでかうおはしましつらむ。」

と、驚き騒ぎ、うち笑みつゝ見奉る。

いと尊き大徳なりけり。さるべき物作りて、すかせ奉り、加持など参る程、日高くさし上りぬ。すこし立ち出でつゝ見渡し給へば、高き所にて、こゝかし僧坊どもあらはに見下さるゝ。

「たゞこの九十九折の下に、同じ小柴なれど、うるはしくし渡して、清けなる屋廊などつゞけて、木立いとよしあるは、何人の住むにか。」

と問ひ給へば、御供なる人、

「これなむなにがし僧都の、二年籠り侍るかに侍るなる。」